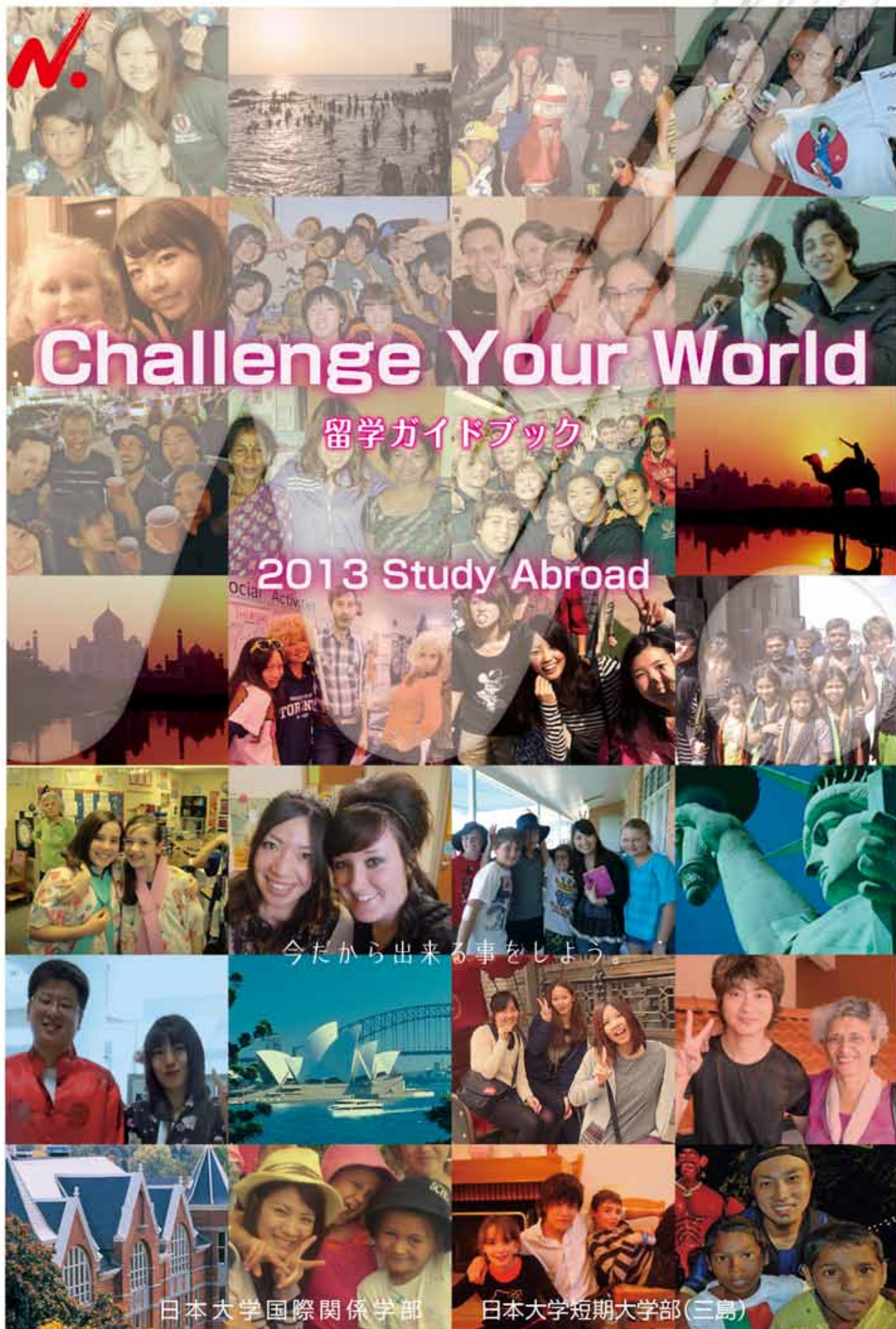




Challenge Your World

留学ガイドブック

2013 Study Abroad

今だから出来る事をしよう

日本大学国際関係学部

日本大学短期大学部(三島)

「Challenge Your World（留学ガイドブック） 2013 Study Abroad」
掲載内容の一部訂正

【訂正箇所】

P6, P7, P8 に記載された募集概要の国際教育センターWeb サイトアドレス（“nihon-u.ac.jp”の前の”g.”が欠落）

誤) <https://sites.google.com/a/nihon-u.ac.jp/cield>

正) <https://sites.google.com/a/g.nihon-u.ac.jp/cield>

【補足説明】

なお、本サイトのアクセスには日本大学学内情報システム Nu-Gmail のアカウントとパスワードが必要です。

各留学プログラムは、外務省の海外安全情報に基づき、国際紛争、テロ、災害、及び人為的、不慮不可抗力による事故等の発生により、渡航または現地での滞在に危険があると判断された時は、募集並びに派遣を中止または途中で帰国させる場合があります。

～ は じ め に ～

「留学」とは単なる語学の習得のみでなく、その国の歴史や文化・風土を肌で感じ、その世界に飛び込んでいくことです。そこで得たものは人生での大きな経験となり、人間力の向上に大いに役立つものです。留学のために半年から1年という中長期間の時間を確保することができるのも、この学生時代しかないのではないのでしょうか。日本人の海外留学者数が減少している昨今、是非皆さんには積極的に留学にチャレンジしていただき、海外の大学で大いに学び、視野を広げ、帰国後もその貴重な留学経験を社会でしっかりと生かしていただきたいと願っております。

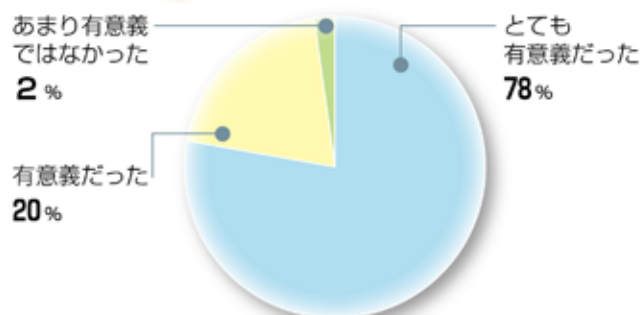
本学部では留学支援のための国際交流プログラムを用意しております。海外の大学等と覚書、合意書を取り交わし、学術、文化の交流を行い、1年間の交換留学をはじめ、半年間の中期留学も実施しています。休学することなく留学し、4年間で卒業するための単位認定や授業料の減免等の優遇措置も整備されています。

また、約1か月間の短期海外研修プログラムや、日本や日本文化等を海外の小中学校で紹介する2カ月間のティーチング・インターンシップ・プログラムも用意しておりますので、あなたの目標に応じて参加してみてください。

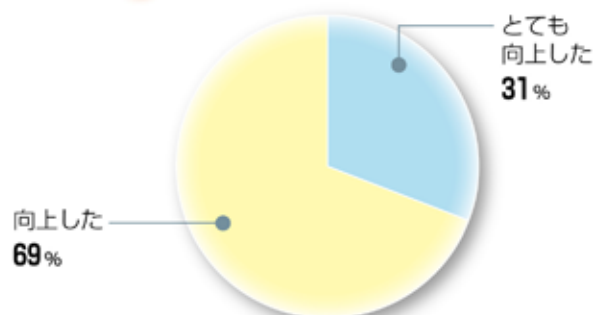
本冊子後半に掲載している昨年度留学した先輩方の報告書（国際交流体験記）と併せてご覧ください。

留学者帰国後アンケート結果

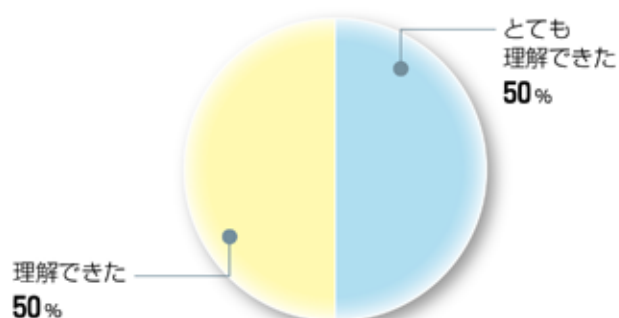
1. 留学はどうでしたか？



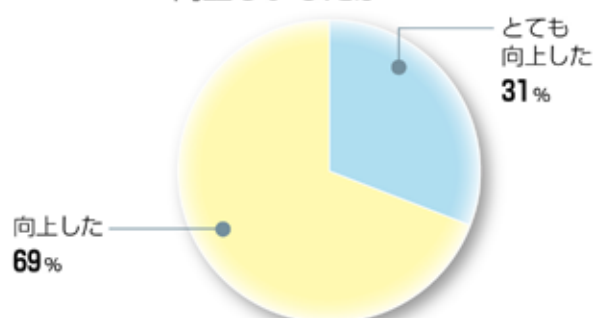
2. 語学力は向上しましたか？



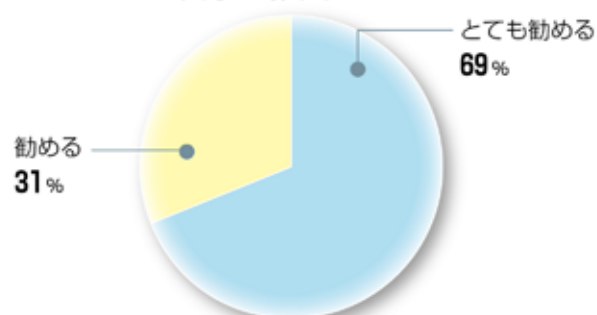
3. 留学した国の文化を理解できましたか？



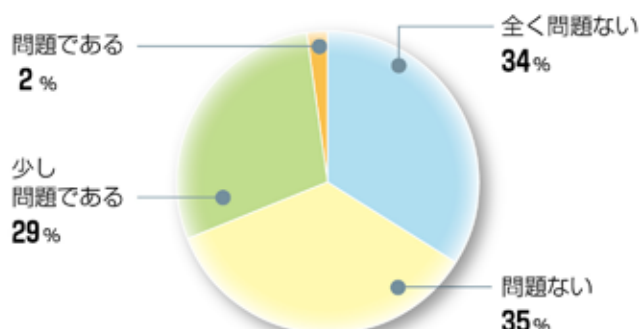
4. ネイティブスピーカーとのコミュニケーション能力は向上しましたか？



5. 後輩へ大学在学中の留学を推奨しますか？



6. 留学先の治安はどうでしたか？



目 次

1 留学・短期海外研修について

◆国際関係学部派遣交換留学・中期留学 募集大学紹介	4
◆派遣交換留学	5
◆中期留学	7
◆ティーチング・インターンシップ・プログラム	8
◆ジョイント・ディグリー・プログラム	9
◆認定留学	9
◆柳川海外交流奨学金留学	9
◆短期海外語学研修	10

2 国際交流体験記の紹介について

◆派遣交換留学	
本部派遣 北京大学（中国）	12
山東大学（中国）	13
学部派遣 モンタナ州立大学（アメリカ）	14
ストーニーブルック大学（アメリカ）	15
静宜大学（台湾）	16
◆中期留学	
セント・ノーバート・カレッジ（アメリカ）	17
ゴア大学（インド）	18
北京大学国際関係学院（中国）	19
◆ティーチング・インターンシップ・プログラム	
Discovery School of Lancaster（アメリカ）	20
West End School（ニュージーランド）	21
◆認定留学	
マッコーリー大学附属語学学校（オーストラリア）	22
◆柳川海外交流奨学金留学	
ヨハネス・グーテンベルク大学（ドイツ）	23
◆短期海外語学研修	
ストーニーブルック大学（アメリカ）	24
ハワイ大学（アメリカ）	25
北京大学国際関係学院（中国）	26
WITT（ニュージーランド）	27



1 留学・短期海外研修について



国際関係学部派遣交換留学・中期留学 募集大学紹介



セント・ノーバート・カレッジ

1898年に創立されたローマカトリック系の4年制大学で、総学生数は約2,000人の小規模大学である。全学生の約7割がウィスコンシン州内から来ている典型的な地域密着型の大学で、留学生の全体における割合は3%と少ない。しかし、小規模ながらも総合大学であり、アメリカ中西部の私立大学の中ではトップ3にランキングされており、講義の内容、教員陣、施設等は充実している。リベラルアーツ、科学、ビジネス、教育学の分野で学位を提供しており、特に経営学、国際ビジネス学、コミュニケーション、数学、科学、生物学の専攻は人気が高い。



ニューヨーク州立ストーニーブルック大学

ニューヨーク市より東に100km程の距離にあるロングアイランドにあり、1,100エーカー（約135万坪）の広大なキャンパスに22,000名の学生が学んでいる。学部としては、人文・科学部、工学・応用科学部、医学部など10学部を擁している。ストーニーブルック大学は、1957年に創立された比較的新しい州立大学であるが、2名のノーベル賞受賞者をはじめとして、広範囲の学問分野において世界的に著名な研究者、学者を数多く抱えており、アメリカの公立大学の中でもトップクラスの大学に数えられている。



モンタナ州立大学

ロッキー山脈を望む標高1,500メートルのモンタナ州ボーズマン市にある学生数12,000名を擁するモンタナ州最大の総合大学である。国より受け取る年間の研究助成費は1億ドルを超え、全米的にも高い評価を得ているリサーチ大学のひとつであり、リサーチ大学としては2006年カーネギー財団によりエール大学、ハーバード大学、マサチューセッツ工科大学に肩を並べるトップ・レベルの大学として格付けされている。広大なキャンパスには文理学部、ビジネス学部、工学部、農学部等8学部の校舎が点在している。



マッコリー大学

シドニーから北西に18キロ、住宅地とテクノロジーパークとの間に広大なキャンパスが広がっている。1967年に創立され、ニューサウスウェルズ州の中でも大規模な大学のひとつであり、特別に学部は設置されておらず、大学全体がひとつの学部として機能するシステムになっている。また、マッコリー大学は留学生を多数受け入れる大学としても知られ、その数は7,000人にも上る。マッコリー大学のポリシーは、学生と講師ができるだけ多くのコミュニケーションをもつこととしており、あちこちで学生と教授が気軽に話している光景が見られる。



WITT (Western Institute of Technology at Taranaki)

ニュージーランド北島のウェストコースト、オークランドとウェリントンの中に位置するニュープリマス市にある国立総合専門学校で、学術、職業訓練の両方のプログラムを提供する高等教育機関である。学生数は約5,000人おり、アート&メディア、ビジネス&コンピューター、看護&健康、マオリ研究などの7つの学部があり、各学部は幅広いコースを提供している。ニュープリマス市は、安全・クリーンな都市で、勉強から離れた余暇時には、スキー、サーフィン、釣りまたは数々の映画の撮影がされた壮大な自然環境を楽しむことができる。



ゴア大学

インドの西海岸に位置するゴア州にある大学で、起源は古く、ボンベイ大学大学院センターが設立された1966年までさかのぼる。1985年に社会・経済的な発展を後押しする役割を期待されながら、ゴア大学はボンベイ大学大学院研究センターの協力の下、創立された。以来、着実に規模を拡大し、現在は24の大学院研究科を有している。教職員、男女学生、特別研究員のための宿泊施設をもち、キャンパス内には銀行、ゲストハウス、郵便局、ショッピングモール等の施設もある。



北京大学国際関係学院

1898年に創設された中国初の国立総合大学。1912年に「京師大学堂」から「北京大学」に改称、2000年に北京医科大学と合併。中国名門大学の一つで、特に人文系、基礎理科学系においては中国最高峰と言われている。外国留学生に対する中国語教育にも力をいれている。キャンパス内には留学生宿舎、ゲストハウスをはじめ、郵便局、銀行、スーパーマーケット、書店、売店などもあり、学校全体が1つの都市機能を有している。また大学や研究機関、ハイテク企業が多く集まる中国のシリコンバレーとも呼ばれる中関村に位置し、落ち着いた環境の中で留学生活を送ることができる。



同済大学

同済大学 (Tongji University) は1907年に同済大学の前身となる上海徳文医学堂として開学し、1927年に現在の同済大学となった。中国の重点大学の中で最も古い伝統ある大学の一つである。現在では、工学、理学、経営学、医学、経済学、文学、法学、哲学、芸術学、教育学の10の学問領域を扱う学部と大学院とを擁する総合大学である。学生数は大学院を含めて約5万人、教職員数は約4,200人。



静宜大学

台湾台中市沙鹿区にある私立大学。英語名は Providence University。カトリック系共学大学でアメリカ合衆国インディアナ州にある American congregation of the Sisters of Providence of St. Mary-of-the-Woods によって創立。大学の始まりは1920年までさかのぼる。キリスト教の教義である愛と慈悲と正義の教えのもと、学生が社会に良い変化を効果的にもたらせるように学問の分野において世界観や生涯の価値観、研究能力、さらには批判的に物事をとらえる力の向上のために学生を導く努力をしている。

派遣交換留学

派遣交換留学とは日本大学本部及び国際関係学部が交換留学に関する協定・覚書・合意書を締結している大学へ学生を派遣する制度です。留学期間は１年間で、「日本大学本部派遣交換留学」と「国際関係学部派遣交換留学」の２種類があります。

大学・学部の代表として選ばれた者だけが交換留学生として提携校に派遣されます。代表者であるため、語学力だけでなく全般的な学力や責任のある行動や態度が求められることになりますが、一方では、提携校の授業料は免除となり、その他奨学金の受給もあります。留学中は現地の学生とともに正規の授業を受けることもでき、大学・学部と提携校を結ぶ友好親善大使として留学期間を過ごすことにもなります。派遣交換留学生だけに与えられた素晴らしい機会です。責任感と興味のある方は是非挑戦してください。

日本大学本部派遣交換留学の詳細は、日本大学本部のホームページ（※１）で確認してください。国際関係学部派遣交換留学の詳細については次頁を参照してください。

その他、ISEP プログラム（※２）を利用し、提携校以外の ISEP 加盟校へ交換留学生として留学できる場合もあります。

※１ 日本大学本部派遣交換留学についての詳細

(http://www.nihon-u.ac.jp/international/study_abroad/)

※２ ISEP(International Student Exchange Program) について (<http://www.isep.org/>)

ISEP とは米国で創設された米国内外の加盟校間で学生留学を推進する非営利法人の全世界的な大学連合組織（コンソーシアム）です。

ISEP を仲介しての交換留学であるため、日本大学本部派遣・学部派遣交換留学とは仕組みが異なります。興味のある学生は国際教育センターにお問い合わせください。

平成26年度募集概要

(各項の内容は変更になる場合があります。最新情報は、国際教育センター Web サイト <https://sites.google.com/a/nihon-u.ac.jp/ciel/> を参照してください。)

大学名称	セント・ノバート・カレッジ St. Norbert College	ニューヨーク州立 ストーニーブルック大学 Stony Brook University	モンタナ州立大学 Montana State University	WITT Western Institute of Technology at Taranaki	マッコーリー大学	同 済 大 学	静 宜 大 学	
所在地 URL	アメリカ ウィスコンシン州 http://www.snc.edu/	アメリカ ニューヨーク州 http://www.stonybrook.edu/	アメリカ モンタナ州 http://www.montana.edu	ニュージーランド ニュープリマス市 http://www.witt.ac.nz/	オーストラリア ニューサウスウェルズ州 http://www.mq.edu.au/	中 国 上海市 http://www.tongji.com.cn	台 湾 台中県 http://www.pu.edu.tw/	
渡 航 期 間 (留学期間)	平成 26 年 8 月 / 9 月～平成 27 年 6 月 / 7 月 (平成 26 年度後期～平成 27 年度前期)			平成 26 年 2 月～平成 26 年 12 月 (平成 26 年度前期～平成 26 年度後期)		平成 26 年 8 月 / 9 月～平成 27 年 6 月 / 7 月 (平成 26 年度後期～平成 27 年度前期)		
募 集 人 数	各校 1 名				2 名	各校 1 名		
応募要件	TOEFL®-ITP	550 点以上		530 点以上	500 点以上	—	—	
	TOEFL®-IBT	79 点以上		71 点以上	61 点以上	88 点以上 (PBT 換算 570 点)	—	
	GPA	2.8 以上		3.0 以上	2.8 以上		2.8 以上	
	その他	—	—	—	—	—	中国語及び中国文化に一定の関心を有すること	
応 募 資 格	①日本大学国際関係学部在籍する学業成績優秀な学生で、留学期間中も引き続き在籍できる者 ②派遣先大学の派遣条件を満たした者							
主 費 用	①派遣先大学授業料：全額免除 ②留学中の日本大学国際関係学部授業料：半額免除 ③留学中の日本大学国際関係学部施設設備資金：徴収しない ④派遣先大学の寮費・食費・テキスト代：自己負担 ⑤渡航費用(往復航空券、査証申請費用、健康診断費用等)：自己負担 ⑥海外旅行保険費用及び派遣先大学指定保険費用：自己負担 ⑦小遣い等：自己負担 〈その他〉 ※日本大学三島後援会海外交流奨学金給付規定による奨学金支給制度有り ※派遣先大学留学中の滞在費は個人負担とする。							
	(前年度 参考)	〈英語圏・ストーニーブルック大学(アメリカ)の例〉 寮費・食費 ¥1,040,000 テキスト代 ¥ 80,000 SBU 保険 ¥110,000 往路航空券・航空税・燃油サーチャージ他 ¥180,000 帰路航空券・航空税・燃油サーチャージ他 ¥120,000 小遣い等 ¥470,000 計 約 200 万円 (1\$≒95 円で計算)				〈中国語圏・静宜大学(台湾)の例〉 寮(二人部屋)・使用料等 ¥80,000 食費 ¥170,000 静宜大学保険 ¥10,000 アクティビティー費用 ¥17,000 往路航空券・航空税・燃油サーチャージ他 ¥60,000 帰路航空券・航空税・燃油サーチャージ他 ¥60,000 小遣い等 ¥200,000 計 約 60 万円 (1NT\$≒2.8 円で計算)		
		※実際にかかる費用は、外国為替レートの変動や先方の料金改定等により変更となる可能性がある。 ※この他に、パスポート申請料、査証申請料、海外留学傷害保険、健康診断料、予防接種費用等がかかる場合がある。						
宿 舎	大学の学生寮					大学の留学生寮	大学の学生寮	
単 位 認 定	留学中に修得した単位は、所定の手続きを経て、その科目の講義内容・履修時間数・成績等を勘案した上、教授会の議を経て、本学部の修得単位として認定する。							
申 込 手 続	以下書類(各1通)を揃え、応募締切日までに国際教育センターへ提出							
	〈英語圏〉 ①派遣交換留学申込書 ②パスポートの写し ③志望動機(英文で A4 用紙 2 枚以内) ④ TOEFL® スコアの写し(ITP レベルⅡは不可、2 年以内に受験したスコアに限る)					〈中国語圏〉 ①派遣交換留学申込書 ②パスポートの写し ③志望動機 (和文で A4 用紙 2 枚以内)		
募 集 ガイダンス	平成 25 年 4 月以降(予定) 詳細は掲示参照 ※選考方法、単位認定等について詳細を説明するので、希望者は必ず参加すること							
応 募 締 切	平成 25 年 11 月 29 日(金) 詳細は掲示参照			平成 25 年 5 月 15 日(木) 詳細は掲示参照		平成 25 年 11 月 29 日(金) 詳細は掲示参照		

※ TOEFL® スコアの有効期限は2年間です。提出スコアの取得日に注意してください。

中 期 留 学

中期留学とは国際関係学部が主催する約半年間の留学プログラムで、国際関係学部と提携している下記大学の付属語学学校等（英語圏及び中国語圏）へ留学します。英語圏では、TOEFL400点以上であれば参加できるチャンスがあり、語学だけにとどまらず各国の文化、政治、経済などを幅広く学べ、さらに現地での成績を元に単位認定がしやすいという魅力があります。

留学期間は派遣大学の学生寮に滞在することになり、安心した留学環境において、勉学に励むことができます。まずは約半年間の中期留学で語学力をスキルアップさせ、帰国後、派遣交換留学に挑戦することも可能です。世界の一流大学キャンパスで半年間留学できる貴重な機会です。

平成25年度募集概要

（各項の内容は変更になる場合があります。最新情報は、国際教育センター Web サイト <https://sites.google.com/a/nihon-u.ac.jp/cield/> を参照してください。）

大学名称	セント・ノーバート・カレッジ	ゴア大学	北京大学国際関係学院
所在地 URL	アメリカ ウィスコンシン州 http://www.snc.edu/	インド ゴア州 http://www.unigoa.ac.in/	中国 北京市 http://www.pku.edu.cn/
渡航期間 （留学期間）	平成25年8月中旬～平成26年3月下旬 （平成25年度後期）	平成25年9月中旬～平成26年2月下旬 （平成25年度後期）	平成26年2月下旬～平成26年6月中旬 （平成26年度前期）
募集人数	20名程度	12名程度	26名
応募資格	留学時学年 2年～3年		3年～4年
語学能力、 検定試験等	TOEFL-ITP400点以上、-IBT32点以上		TOEFL-ITP400点以上、-IBT32点以上 ※留学出発までに TOEFL®-ITP450点以上を取得することを目標とする。
研修内容	① 集中英語コース（ESL）及び CIE コース* 対象者：TOEFL® ITP のスコアが 400 点以上 550 点未満の学生 ② 秋学期学部授業の正規履修及び CIE コース*（正規課程授業料は全額免除） 対象者：TOEFL®-ITP のスコアが 550（IBT79）点以上の学生 *CIE コース：Center for International Education 日大生用に開講する講義形式の授業で 1 月から 3 月までの 9 週間行われる。		オリエンテーション及び英語強化トレーニング（計 150 時間） 文化・文学・歴史・哲学（計 120 時間） 政治・経済・経営（計 150 時間） ジェンダー・移民・食物・観光等の社会問題（計 120 時間） インド国内研修旅行（2 回に分け計 8 泊 10 日） レポート作成・発表 国際関係とグローバル化 国際交流と異文化コミュニケーション ソフトウェアと国家 中英バイリンガル文献購読 国際問題研究 中英バイリンガル会話 （各計 60 時間）
留学費用 （前年度参考）	①	②	1\$ ≒ 95 円で計算
	SNC 費用：約 1,250,000 円 内訳 ESL コース授業料 \$3,782 CIE コース授業料 \$2,127 寮費・食費・他 \$7,205	SNC 費用：約 870,000 円 内訳 秋学期授業料 全額免除 CIE コース授業料 \$2,127 寮費・食費・他 \$7,046	GOA 大学費用：約 620,000 円 内訳 授業料 \$3,800 寮費・食費・他 \$2,700
	旅行・ビザ費用：約 230,000 円	旅行・ビザ費用：約 230,000 円	旅行・ビザ費用：約 200,000 円
	合 計：約 1,480,000 円	合 計：約 1,100,000 円	合 計：約 820,000 円
※上記以外に海外旅行傷害保険料、現地でのお小遣い等が必要となる（約 10 万円～約 20 万円）。 ※日本大学三島後援会海外交流奨学金給付規定による奨学生選抜制度有り。 ※実際にかかる費用は外国為替レートの変動や先方の料金改定等により変更となる可能性がある。			
宿 舎	セント・ノーバート・カレッジ 学生寮	ゴア大学 ゲストハウス	北京大学 学生寮
単位認定	「単位認定科目一覧」に基づき単位互換可能と認められた科目の範囲で講義内容・履修時間数・成績等を勘案した上、本学部の修得単位として認定する。		
申込手続	国際教育センター Web サイト （ https://sites.google.com/a/nihon-u.ac.jp/cield/ ）を参照してください。		
募集ガイダンス	平成25年4月上旬 詳細は掲示参照 ※選考方法、単位認定等について詳細を説明するので、希望者は必ず参加すること		平成25年10月頃 詳細は掲示参照
応募締切	平成25年4月下旬 詳細は掲示参照		平成25年10月下旬 詳細は掲示参照

※ TOEFL® スコアの有効期限は 2 年間です。提出スコアの取得日に注意してください。

ティーチング・インターンシップ・プログラム

国際交流の基本的目的のひとつに、国際的な状況下で実践家として活動でき、異なった文化価値が理解でき、あらゆる状況に柔軟に対応できる個人を養成する点があります。ティーチング・インターンシップ・プログラムは、この能力を学生たちに身に付けさせるために計画・実行されています。

プログラムは、学内事前研修と現地研修の2つから構成されています。学内事前研修は、現地の生徒に対する教授法を学び、日本文化や日本語を英語で説明できる能力を養成することに主眼を置いています。また、現地の文化的特徴なども学びます。

約8週間の現地研修では、本学と提携している海外の小・中学校（一部高校部門も含む）へ Teaching Intern 生として派遣され、現地の生徒達に日本の言葉の初歩及び日本の文化を英語を使って教えます。日本文化や日本語を英語で教えるプロセスを通して、英語運用能力やコミュニケーション能力を養成し、更に、現地地域文化やその根底にある文化価値を実際の生活体験や教育体験から学び、柔軟さをもった価値観を育成します。

（前年度派遣者数：9名）

平成25年度募集概要

（各項の内容は変更になる場合があります。最新情報は、国際教育センター Web サイト <https://sites.google.com/a/nihon-u.ac.jp/cield/> を参照してください。）

派遣先 (昨年度の例)	Discovery School of Lancaster	Devon Intermediate School Highlands Intermediate School West End School	Belgian Gardens State School Ryan Catholic College Saint Anthony's Catholic College
所在地	アメリカ サウスカロライナ州	ニュージーランド ニュープリマス市	オーストラリア タウンズビル市
派遣期間	平成26年2月～平成26年3月（約8週間）		
募集人数	若干名（各校1～2名）		
応募資格	①日本大学国際関係学部在籍する学業成績優秀な2年生以上で、留学期間中も引き続き在籍できる者 ②平成23年6月以降に受験したTOEFL®のスコアを提出できる者 ③教職課程または、日本語教員養成講座を履修していることが望ましい		
派遣費用 (前年度参考)	オーストラリアへ派遣された例 ・ホストファミリー手配及び費用（8週間） ￥172,000 ・往復航空券・空港税・燃油サーチャージ他 ￥100,000 ・海外旅行保険 ￥30,000 ・お小遣い等 ￥40,000 ￥342,000 ・日本大学三島後援会海外交流奨学金給付規定による奨学金支給制度有り。 ・期間中の滞在費は全て個人負担とする。		
宿 舎	現地の家庭にホームステイ		
単位認定	第1・2次選考に合格し、その後の研修（事前指導講座）を受け、最終的に派遣が決定した者は、「特殊講義Ⅱ（2010年度入学者まで）」の成績評価の対象となる。また、最終選考に合格した場合、派遣生として所定の時間数を実習し帰国後単位認定願を提出することにより「国際交流（インターンシップ）（2010年度入学者まで）」または「ティーチング・インターンシップ（2011年度以降入学者）」の単位が認定される。		
申込手続	以下書類（各1通）を揃え、応募締切日までに国際教育センターへ提出 ①ティーチング・インターンシップ・プログラム申込書 ②パスポートの写し ③志望動機（Word を使用し英文で A4 用紙2枚以内） ④ TOEFL® スコアの写し（ITP レベルⅡは不可、2年以内に受験したスコアに限る）		
募集ガイダンス	平成25年4月初旬予定 詳細は掲示参照 ※選考方法、単位認定等について詳細を説明するので、希望者は必ず参加すること		
応募締切	平成25年5月17日金		

※ TOEFL® スコアの有効期限は2年間です。提出スコアの取得日に注意してください。

ジョイント・ディグリー・プログラム

ジョイント・ディグリー・プログラムとは、国際関係学部在籍学生が3年次後期より2年間アメリカのニューヨーク州立ストーニーブルック大学に留学し、帰国後の半年間を国際関係学部にて修業すれば、最短5年間で双方の大学の学士号を取得することができるプログラムです。

募集ガイダンスは10月頃に行われ、応募締切は11月下旬の予定。派遣期間は翌年8月より最短で2年間です。応募者は留学時に3年次の学生であることが条件で、申込期限までに TOEFL®-iBT スコア、累積 GPA 等の応募条件を満たしていることが必要です。

留学先であるニューヨーク州立ストーニーブルック大学より入学許可を得た学生は国際教育センターを通じ速やかに所定の留学手続を取ると共に、留学出発までに留学アドバイザーと面談し留学中の履修計画につき十分に相談してください。

選考方法等の詳細は募集ガイダンスにて確認してください。

認 定 留 学

認定留学では、国際関係学部在籍者が、以下の条件を満たし、事前に必要書類を提出して学部の承認を得た場合は、休学することなく海外の大学に留学することができます。

留学の期間は、6か月単位で、2年間で限度とします。留学の期間は修業年数に算入することができます。

留学を希望する者は、国際教育センターで認定留学に関する手続きの説明を受けて、各大学等への入学審査等の時間も考慮し、留学希望時期より最低でも半年前から準備を始めるようにしてください。

留学先の入学審査等を済ませた後、最終的に国際関係学部へ提出する書類提出期限は、前期からの留学の場合は1月15日、後期からの留学の場合は6月20日です。詳細は国際教育センターにて確認してください。

(条件1) 外国の大学とは、外国における正規の高等教育機関で学位授与権を有するもの、またはその付属の教育機関を指します。

(条件2) 当該外国の大学で学修することが、教育上有益であると認められることが必要です。

(条件3) 当該学生が外国での教育を受け得るだけの能力を有していることが必要です。

柳川海外交流奨学基金留学（第1種）

日本大学名誉教授柳川三郎先生の寄付金を基金とした奨学金で、主としてドイツにおいて研究・研修を行う者に対して給付されます。対象者は、国際関係学部在学中の学生で、学業・成績・人物が優れていること、ドイツ語を履修済み、又は履修中の者となります。詳細については学生課へお問合せください。

短期海外語学研修

短期海外語学研修とは、語学の実践力を向上させる目的で、日本大学及び国際関係学部・短期大学部が外国の大学などで実施する約1か月程度の短期海外研修に参加するプログラムです。実践的なスピーキングやリーディングなどの力を養いながら語学力を向上させることはもちろん、その国の生活文化に直接触れられる機会となります。

日本大学本部主催の短期海外研修の詳細は、日本大学本部のホームページ

(http://www.nihon-u.ac.jp/international/study_abroad/summer_school/)

で確認してください。

国際関係学部及び短期大学部主催の短期海外語学研修については下記を参照してください。

平成25年度募集概要

(各項の内容は変更になる場合があります。)

大学名称	ニューヨーク州立 ストーニーブルック大学	WITT	北京大学 国際関係学院	TIEC	(短期大学部主催) ハワイ大学
所在地 URL	アメリカ ニューヨーク州 http://www.sunysb.edu/	ニュージーランド ニュープリマス市 http://www.witt.ac.nz/	中国 北京市 http://www.pku.edu.cn/	アメリカ テキサス州 http://www.tiec.org/	アメリカ ハワイ州 http://manoa.hawaii.edu/
研修期間 (予定)	平成25年8月3日～ 17日(15日間)	平成25年8月19日～ 9月17日(30日間)	平成25年8月4日～ 8月27日(24日間)	平成26年2月8日～ 3月9日(30日間)	平成25年8月4日～ 21日(18日間)
授業日程	9:00～15:50	8:30～15:00	① 8:30～11:30 語学研修 ② 14:00～17:00 自由研修	① 8:30～12:30 15:00～17:00 ② 8:30～12:30 PM: アクティビティ	9:00～15:30
募集人数	20名程度	20名程度	20名程度	30名程度	20名程度
(最少開催人数10名)					
応募資格	国際関係学部・短期大学部 (三島)・経済学部の在学生	国際関係学部・短期大学部(三島)の在学生			
研修費用 (前年度参考)	約490,000円 語学研修費、宿泊費、食費、 旅行・ビザ費用など	約540,000円 語学研修費、宿泊費、食費、 旅行・ビザ費用など	約240,000円 語学研修費、宿泊費、食費、 旅行・ビザ費用など	約470,000円 語学研修費、宿泊費、食費、 旅行・ビザ費用など	約320,000円 語学研修費、宿泊費、食費、 旅行・ビザ費用など
上記以外に海外旅行傷害保険、現地でのおこづかい等が必要となる					
宿 舎	大学の学生寮	ホームステイ	大学の留学生寮	ホームステイ	大学の学生寮
単位認定	「国際交流(外国語実習)」(国際関係学部)又は「海外語学実習」(短期大学部)の2単位を修得できる。 但し、本人による申請に基づく履修登録を行うことが必要				「海外語学実習」(短期大学部)の2単位を修得できる。但し、本人による申請に基づく履修登録を行うことが必要
申込手続	以下書類を揃え、応募締切日までに学生課へ提出 ①参加申込書 ②海外研修について誓約書 ③医療同意書				
募集ガイダンス	4月/2回 5月/2回(予定) 詳細はUNIPA※参照			4月/2回 9月/1回 10月/3回(予定) 詳細はUNIPA※参照	4月/2回 5月/2回(予定) 詳細はUNIPA※参照
応募締切	5月末日(予定) 詳細はUNIPA※参照			10月末日(予定) 詳細はUNIPA※参照	5月末日(予定) 詳細はUNIPA※参照

※「UNIPA」は「UNIVERSAL PASSPORT EX」の略。



2 国際交流体験記の紹介について





北京大学（中国）

留学期間：平成23年8月22日～平成24年6月23日

「目標＋計画＋行動＋挫折＋反省」＝成功

国際ビジネス情報学科3年
金香（キム ヒャン）

私は平成23年8月から平成24年6月まで日本大学交換留学生として、北京大学の光華管理学院（商学部）に10ヵ月留学してきました。

北京大学への留学を決める際、私はとても悩みました。なぜなら日本へも韓国人留学生として来ているので更に留学することに躊躇いを感じていました。しかし、私が中国への留学を志願した大きな理由は中国語の上達というよりも「自分の価値観を変え、視野を広げること」でした。将来的にこの機会を如何に生かすことができるかということも深く考えました。今振り返り考えてみると北京大学への留学を決めたのは間違いではなかったと思います。

北京大学はとても大きく有名な総合大学として、各国から優秀な学生が留学に来ているので様々な国の学生と友達になれました。また北京大学に来て一層友達の大切さを感じました。友達も貴重な存在です。皆それぞれの国から来て自分と同じような立場に立っているため、自然と仲良くなり、支えあうことができました。

私なりに一番の収穫だったことは北京大学の学生が熱心に勉強しており、授業中先生と学生とのコミュニケーションが活発であり、学生が積極的に先生に質問している姿を見て影響を受けました。また、クラスのチームワークで一つの課題を完成させるために行った議論がとても印象に残りました。そして、商学部なので英語を使っている授業がほとんどであり、英語の必要性を更に感じました。

このように留学中に私は貴重な経験をたくさん作りま

した。結果として、多種多様な価値観を持った人々に出会い視野が広がり、また中国語と英語に囲まれて生活することで中国語力と英語力をあげることができました。韓国と日本とは異なった環境に身を置いたので、さまざまな価値観に触れることもでき、語学力を鍛えることもできました。

何よりも「失敗を恐れない」ということが楽しむ事の鍵であり、自分が得た一番大きな成果だと思います。

これから留学を考えている方々へ

留学生生活を振り返ってみると一言ではとても言い表せません。留学にあたって一番大事だと思うことは、目標＋計画＋行動＝成功だと思います。つまり、留学を通じて何をしたいのかという目標を明確し、その目標の計画を立てて強い意志を持って行動することだと思います。留学する前はだれもが明確な目標を持っていますが、それを現地にきて実現するのは難しいです。でも、自分が何をしたいのかを考え生活も勉強も積極的に、やる気を持って前向きで自分がすべきことを明確にするほうがよいです。

勉強面では留学する前にまず自分で中国語のレベルを最大限に上げるように努力し、出国前までにはHSK 4－5級を取っておくほうが良いです。北京大学には世界中からたくさんの方が留学しているためランゲージパートナー（日本語と中国語、英語の相互学習）を見つけ一緒に勉強すると良いです。



北京大学構内の未名湖と博雅塔前にて



故宮の中にて

山东大学（中国）

留学期間：平成 23 年 9 月 3 日～平成 24 年 6 月 27 日

本部派遣

海外で意識させられた日本

国際交流学科 4 年
作野 由香里

私の派遣先は、中国山東省の省都、別名「泉の城」と呼ばれる済南市であった。私が留学を決意したきっかけは、大学入学時に何気なく選択した中国語の授業である。気付けば、いつかこの言語を用い、人の役に立ちたいと考えるようになっていた。そんな中、縁もあり、留学するチャンスが訪れた。私はこの 10 カ月間、海外から日本を客観視し、多くのことに気付かされた。そこで、私が特に意識させられたことに、日本人は何故「自己主張」できないか、がある。以下には、それを考えさせられた経緯を述べる。

まず、中国には時計が無い。もちろん、全く無いわけではない。だが、日本に比べれば少ないというのが私の印象だ。学内に時計塔こそあったが、公共の場に時計はなかなか見当たらない。そこで、私は日本の「時計文化」を意識させられた。そんな中、中国人との交流から彼らに対し、物事を「そのときになったら決める」という印象を持った。一方で、「前もって決めてほしい」というのが多くの日本人の概念だろう。また、現地の多くの外国人も、「そのときになったら決める」の方法を取る傾向にあると感じた。そこで私が思ったのは、これは日本人が「自己主張」を苦手とする一つの原因にならないかということだ。思えば日本では、何事も事前に準備を行ってから実行することが多い。そのため時間管理の習慣は根付いているが、急に迫られる主張や対応にはやや弱いと感じる。

もう一つ、私が現地で意識させられたことに、日本の

「曖昧文化」がある。とりわけ、外国人の返答の特徴からこれを意識させられた。というのは、断定的かつ意志がはっきり表れた返事である。例えば会話の中で「私は嫌い」と答え、その後ろに「なぜなら」と意見を持ってくるスタイルだ。一方で日本人は、肯定と否定の隙間に入り、相手の気持ちを配慮しようとする。結果、どちら寄りにもならないポジションが心地良く、議論は避けがちである。そこで、これもまた日本人が「自己主張」を苦手とする原因であると感じた。だが、多くの外国人は、日本人のこうした配慮を始めから期待していない。彼らは、ダイレクトな返答と、互いの持つ考えをシェアできることを期待しているのだ。

このように私は、海外にて、日本の「時計文化」と「曖昧文化」を強く意識させられた。そして、そこに日本人が「自己主張」を不得意とする原因を見出した。また、国際社会では「自己主張」できることは必須であると改めて感じた。私としては、国際社会に生きる上で、文化の切り替えを柔軟に行なえる者でありたい。自国の文化も、国際社会での在り方も、並行し尊重していきたい。そのために、まず自国をよく理解することに努め、日本は、日本人は何故そうなのかと問われた際には、「自己主張」をもって答えたい。

最後に、こうした機会を下さり、影で支えて下さった全ての方にお礼を申し上げます。今回の経験を生かせるよう、今後も私はさらなる挑戦を続けます。ありがとうございます。



中国のテレビ番組を舞台上で演じたときの様子



全員元クラスメイト



モンタナ州立大学（アメリカ）

留学期間：平成24年1月4日～平成24年12月30日

自分への挑戦

国際文化学科4年
花井 祥子

この留学は私にとって一番の挑戦でした。私は人見知りで、消極的な性格だったので今まで「自分から何かをする」ということはあまりありませんでした。知り合いもない、言葉も通じない、全く異なった文化の中で、自力で自分の環境を築くことは私の一番やりたいことであり、最も避けたいことでした。なので、私がこの一年間の留学に応募したのは、「英語が話せるようになりたい」とか「他国や自国の文化を学びたい」という理由はもちろんのこと、自分への挑戦でもありました。

アメリカへ到着した当初は言語や自分の性格で苦労しました。言語面では相手の言っていることすら聞き取れない状態で、簡単な会話を交わすのすら難しかったほどです。その上、この性格なので人に言葉をかけるのが本当に怖かったです。

しかし、少し経つと異文化の環境にも慣れ、人と話す恐怖心も薄れていきました。また、自分一人で自分の環境を創り上げることの面白さや素晴らしさにも気づかれました。自分が怖くてできなかったことが意外にも自分が好きなことであったと実感しました。

授業が始まってからは課題に追われる日々でした。一クラスで出される課題の量が多い上、すべての教科で必ず出されるので本当について行くのが大変でした。平日の夜は図書館で勉強するのが当たり前で、徹夜で勉強することもしばしばありました。大変でしたが、日本ではしたことのない貴重な体験ができたと思います。

休日は平日のストレスを発散させる日でした。ポーズマンは自然の豊かな町なので、ハイキングやスノーボードなどに行くこともできます。また、近くに映画館のついたショッピングモールもあり、そこへ映画を見に行ったり、買い物に行ったりもしました。

イベントもたくさんあって楽しかったです。中でも、ハロウィンは一番思い出に残っています。ハロウィンの日は授業に仮装してくる人もいて、アメリカの文化を目の当たりにしました。自分もアリスインワンダーランドのマッド・ハッターに仮装して、ハロウィンのイベントにたくさん参加しました。友達がアリスに仮装してペアのコンテストに出場したのも良い思い出です。

この留学で私が目標にしていたのは「色々な経験をすること」でした。たとえ興味がなかったことや、避けたいことでも、積極的にチャレンジしました。そうすることで、自分への新たな発見があり、たくさんのことを学ぶことができました。また、意味のない経験は無いということに改めて感じました。留学で経験した全てのことが私の財産となり、今の私があるように思います。

この留学を通して、語学力や自他文化への理解の向上だけでなく、自分の成長も感じることで嬉しく思います。この一年間の海外での生活は私に勇気と自信をもたらしてくれました。留学は終わってしまいましたが、この経験をいかして、これからも色々なことに挑戦し、多くのことを経験していきたいと思っています。



Home party



Halloween



ストーニーブルック大学（アメリカ）

留学期間：平成 24 年 1 月 23 日～平成 25 年 1 月 20 日

挑戦の日々

国際文化学科 3 年
和田 奈央美

今までの 3 年間の大学生生活を振り返ってみると、私は本当に 1 年 1 年、後悔のない充実した年を過ごすことが出来たと思います。大学に入って、中学生の時から夢で、ずっと憧れだったアメリカに派遣交換留学生として 1 年間留学させていただけたこと、それは私にとって、人生の中で 1 番と言えるくらい、心に残る経験でした。

今までアメリカ、オーストラリア、イギリス、タイに旅行、留学経験があるのですが、この派遣交換留学と今までの経験の大きな違いは、頼れる人もおらず、何もわからない土地に 1 人で行くということでした。もちろん掃除も洗濯も料理も風邪をひいたときも助けてくれる家族はいません。辛いと思うことも 1 年間いればないとは言いません。しかし、それ以上に留学に来てよかったと思える瞬間が本当にたくさんあります。だからいくら辛いことがあっても私は 1 度も「日本に帰りたい」と本気で思ったことはありませんでした。

アメリカに行って自分自身が変わったことはたくさんありますが、ここでは大きく分けて 2 つ挙げさせていただきます。1 つめはアメリカには、たくさんの違う人種が集まっていて、いろんな国の友達ができること、いろんな国の言葉や文化が知れること。どこの国の出身なのかは関係なく、“その個人”として相手を見ることが出来るようになります。だから私は本当の意味で人種差別をしない、偏見はないと胸を張って言えます。そしてそれが人種のるつぼである、アメリカ留学のよさの 1 つなのかなと思います。



クリスマスパーティーでのひととき

また私は中学生くらいのころからアメリカのムービースターに憧れ、音楽も洋楽しか聞かない、映画も洋画しか観ない、食べ物でさえもジャンクフードの方が好きなくらいアメリカ文化に憧れがあり、まさにアメリカに“恋”をしていたのですが、アメリカに長期間いたからこそ気付けた“日本のよさ”がたくさんありました。それは日本人の謙虚さ、人を思いやる気持ちです。そして、今は日本人に生まれてよかったと日本人であることを誇りに思えます。それがアメリカに行くまでは気付かなかった私の中で大きく変わった価値観の 2 つめです。

私がアメリカで、意識していたことは、とにかく積極的に何でも挑戦してみることでした。年齢、性別を問わず、とにかく自分から積極的にコミュニケーションをとるように心がけていました。ほかにも、日本語の翻訳の手伝いをしてみたり、授業で日本語のアシスタントをしたり、就活を試みたり。ここには書ききれないくらいたくさんのことに挑戦した年だったと思います。

留学を通して学んだことは、“自分のやりたいことを明確にし（目的を持ち）、それを目標としてそれに向かってひたすら努力をすること”、これが大学生活を楽しむキーポイントになるのではないかとということで、これがみなさんへのアドバイスとなればいいなと思います。

最後に、日本で支えてくださった学校の皆様、家族、友達。みなさんなしではありえなかった素晴らしい経験でした。本当にありがとうございました。



みんなにメイクをさせてもらったあとの 1 枚



静宜大学（台湾）

留学期間：平成 24 年 2 月 7 日～平成 25 年 1 月 19 日

台湾留学記

国際文化学科 3 年
加藤 義之

私はこの台湾の静宜大学に留学する前に北京大学の短期海外語学研修に参加しました。そこで先生や街の人々、同世代の大学生と中国語で会話し交流する中で絶対中国語をマスターしたいという気持ちが強くなりすぐに長期留学へ挑戦しようという意思が固まりました。帰国後すぐに長期留学先を探し始め、申し込み、面接を受け、静宜大学への留学が決定しました。出発の日まで不安はなく、日本でできる勉強を最後までしてその日を迎えました。

空港に着くと静宜大学の学生が迎えに来てくれて、同時期に来た留学生とも顔合わせをし、バスで大学まで移動し私の留学生活が始まりました。静宜大学まで迎えに来てくれたのは IFB というサークルのようなものに所属する学生で英語や日本語、スペイン語が堪能である人が多く、来たばかりでとにかく右も左もわからない私達をサポートしてくれました。とくに最初の数週間は IFB の活動プログラムとして留学生たちで旅行に行くことが多く、そこで欧米から来た学生や中国大陸から来た学生などさまざまな人とコミュニケーションをとり多くの人達と友達になることができました。

留学生は基本的に学校内の寮に住み、部屋は主に留学生同士になることが多いようです。三人一部屋で私のルームメイトはリトアニア人と中国人でした。隣の部屋にはスペイン人と台湾人がいて、よく一緒にご飯を食べに行ったりしました。同じ階には日本人は一人もおらず少し困ったときなど近くに日本人がいると確かに便利ですが、どうしても日本語を話す時間が多くなりがちです。そういう意味では運がよかったかなと思います。とにかく毎日が中国語漬けで、一日中中国語で話していると頭の中が中国語だらけで夢でも中国語で話しているという日が何日も続きました。

朝からは大学の授業とは別に中国語の授業が毎日 2 時間あります。最初に小テストを実施し、クラスを分け、レベル別に少人数で授業を受けます。私は高級クラスに入ったので先生の話すスピードに慣れるまでは大変でしたが、一ヶ月も毎日聞き続けていると自分でも驚くくら

いの進歩を実感することができました。私のクラスは自分を含め三人で、ベトナム人と日本人という構成でした。少人数ということもあり授業は聞いてノートをとるといって一方的なものではなく、教科書を使いながらもとにかく会話を中心にありとあらゆる話題を話し、先生がその都度意見を聞くというものでした。私の中国語の授業は毎朝 8 時からだったので学校内にある寮に住んでいるとはいえ、眠気で頭の回らない時もありました。それでもやはり毎朝の授業はレベルアップに大いに効果があったと思っています。中国語の授業の外には「日交流」という日本人専用で設けられた授業があります。静宜大学の日本人留学生は中国からの留学生に次ぎ、二番目に多く常時 30 人前後はいる状態です。そういうこともあり前期には大学側からこの「日交流」を履修することを勧められます。しかし日本人専用の授業ということもあり、授業は全て日本語で行われます。資料もテストも全て日本語です。これでは日本の大学で授業を受けているのとは大差ないので後期からは全て大学側の授業をとり苦労はしましたが、台湾人と一緒に授業に参加し、グループを作り、討論をすることでとても貴重な経験ができたと思っています。

この一年の長期留学を通して日本にいては絶対に経験することのできないたくさんの貴重な経験をすることができました。最初は慣れない生活環境に戸惑うこともありましたが、それを受け入れ、順応することでまた新たな自分を見つけることもできました。私の留学生活は終わりましたが、台湾とはこれから先も何か結びつきのある国であればいいと思います。そして将来両国に貢献できる人物になれるようこれからも精進していきたいと思っています。



高美湿地旅行



セント・ノーバート・カレッジ (アメリカ)

留学期間：平成 23 年 8 月 24 日～平成 24 年 3 月 11 日

アメリカでの出会い

国際交流学科 4 年
伊東 杏里菜

私は、平成 23 年 8 月から平成 24 年 3 月までアメリカのウィスコンシン州にあるセント・ノーバート・カレッジに中期留学をしました。約 7 カ月間も日本から離れるということだったので、正直不安で出発時は子供のように泣いたのを覚えています。いざウィスコンシン州にあるグリーンベイ空港に到着すると、アメリカの空の広さ、広大な自然、出迎えてくれたアメリカ人の先生、すべてが新鮮で少し不安が軽くなったのを今でも覚えています。

到着日に、私は 4 人部屋に配属され、韓国人のソンアというルームメイトに会いました。文化も似ていたために、23 歳である彼女は私のお姉さんのような存在になりました。そしてあとからコーリー、ミッシェルの二人のアメリカ人との共同生活がはじまりました。私は、アメリカに行った経験、一人暮らしの経験がなかったので、最初は慣れませんでした。1, 2 カ月したころから彼女たちとコミュニケーションを図れるようになり、特にコーリーは私の宿題をいつも教えてくれました。ルームメイトと一緒にクリスマス会や料理を振舞いあうなどたくさんのかつを共にしました。とても良いルームメイトに恵まれたと彼女たちに感謝しています。

学校での生活は、毎日宿題に追われ図書館に通う日々が続きました。私たち日本大学の学生は、ESL (English is Second Language) クラスで、8時から12時まで英語の勉強をしました。そのクラスでは、サウジアラビア人、韓国人、中国人、台湾人、フランス人、スペイン人といった様々な人種の人と一緒に英語を学びます。お互いにお互いの言葉を教え合ったり、クラスの後みんなとカフェテリアでお昼を食べたりと、まるで家族のように一緒に生活しました。文化の違いもちろんありましたが、文化の違いをお互いに知ることが出来ましたし、相手の国に興味を持つことが出来ました。また第二言語が英語という共通点で、一緒に学ぶ仲間、ライバルとして刺激し合えたと思います。

また勉強だけではありません。学校にはジムも設備されており、週 2 回開催される Zumba というダンスやヨ

ガなどに参加しました。またクラブ活動にも参加出来るので、Beyond Border や Japan クラブといったクラブ活動に週 1 回参加していました。そこでは、アメリカ人と交流することができ、一緒に international food party や Halloween party などを行いました。そこで仲良くなった友達の家に土日にお邪魔するなど、アメリカ文化に触れる事ができました。どれも貴重な体験が出来たと思っています。

私は留学を決意するのに時間がかかりましたが、行って良かったと思っています。アメリカで出会ったすべての人が私の財産であり、過ごした日々はこれから私の糧になると思います。日本に帰国して一ヶ月が経ちますが、そこで過ごした日々はまるで夢のように感じる事があります。しかし同じ時に戻れませんが、私は彼らと手紙やスカイプで連絡を取っています。日本人の友達と変わらない友達を得る事が出来たと本当に思います。もちろん彼らと過ごすことは必然的に英語力の向上に繋がると思います。すべてが無駄ではなかったのだと思います。大学最後の日、私は涙をこらえられずにいたら、私の先生がこう言いました。"Don't cry it is over, be smile it happened." 私はこの言葉で、すこし別れの寂しさが紛れました。近い未来に彼らにアメリカや日本で会うことが、今の私の楽しみになっています。

Beyond Border のメンバー▶



◀ Japan クラブ



ゴア大学（インド）

留学期間：平成 23 年 9 月 15 日～平成 24 年 3 月 2 日

インドで得た宝物

国際文化学科 3 年
前嶋 由梨

私は、以前から「留学すること」そのものに憧れていた。外国に住んで、英語だけの環境に身を投じ、異国の空気を肌で感じてみたいと考えていた。中期留学の募集を知ったとき、インドという発展途上の国に対する漠然とした憧れの気持ちが芽生えた。この機会を逃したら、半年間もインドに住める機会なんて一生ない。そう思い、私はゴア大学中期留学への参加を決意した。しかし今では、ゴア大学に決めて本当によかったと思っている。

ゴアはインドの中で最も小さく、最も豊かな州である。美しいビーチを多く有し、リゾートのために世界中から観光客が訪れる。ポルトガル領であった影響が中心街であるパナジの街並みに残り、良い意味で、インドらしくない。ゴアの人々はあたたかく、私たち日本人にも住みやすい場所だった。

ゴアの人々はほとんどネイティブ並みに英語を話せるが、主にヒンディー語や州言語のコンカニ語を話す。普通に生活をしているだけでも、あらゆる場所で接する現地の人々の話す言語や就いている仕事、住んでいる家や生活のレベルから、インドのヒンドゥー教徒を取り巻くカースト制度の影響を感じることが出来る。街やビーチでは、物乞いの子どもに出会った。ひとたび違う州に出れば、街の看板の文字は見たことのないものになり、人々の顔つきや性格、話す言葉も全く違うものになる。日本では決して経験できないことだ。インドの特徴を一言で現すのは難しいが、ゴア大学の先生やゲストハウスで出会った人には "Unity in Diversity" であると教わっ

た。多様性の中で、同じ「インド人」としてまとまりを形成しているのだ。

ゴア大学の授業では、こうしたインドの特徴に触れながら、文化、歴史、哲学、経済学、社会学など、幅広い分野を学んだ。また、インドの料理や刺繍など、実習の体験もできる。留学前は英語力に不安のある人も多いかもしれないが、先生方は私たちが理解することを最優先してくれるので、難しい単語は言い換えてくれるし、質問には優しく答えてくれる。最初の一ヶ月は英語力強化コースとして英語の文法やスピーチを学ぶ。私はこの授業で、自分の英語に対し自信をつけ、人前で話すことに以前より慣れることができた。自分がどれだけ授業に真剣に取り組むかで、得られるものは全く違ってくる。

私にとって最も大きな思い出は、二ヶ月かけてソーラン節の発表の準備をしたことだ。私は体力も筋力もなかったため、初めは最後まで踊りきることすらできなかった。一時は自分に絶望し、何度もへこたれ、泣いた。しかし、どうしてもみんなと一緒に踊りたかったため、毎朝ウォーキングと筋トレをした。仲間たちはわたしの自主練習に協力してくれたり、相談に乗ってくれたりした。その結果、修了パーティでは最高の思い出を作ることが出来た。

インドは、私たち留学生をあたたかく迎えてくれる。そこで自分をどこまで成長させられるかは自分次第。私にとって、この半年間の日々は、かけがえのない宝物になった。



英語の先生と



南インド旅行で、現地の人たちと



北京大学国際関係学院（中国）

留学期間：平成24年2月28日～平成24年6月30日

生きた言葉

国際関係学科3年

加藤 賢一

この半年間の留学は私の物事に対する思考、生活などのあらゆる方面において多大な影響を与える素晴らしい体験となった。特に、私は今回の留学で初めて、いつも生活し、慣れ親しんでいた土地を離れ生活したので、生活の些細な事でさえもとても新鮮に感じられたのである。

この留学においてもっとも印象深いことといえば、やはり「生きた言葉」に直接触れているいろんなことを学べたことだろう。例えば、市場へ買い物をしに行ったとする。こんなとき、教科書で習ったフレーズをいくつか思い出して言う。しかし、当たり前であるが99%は教科書どおりのシチュエーションにはならない。私はカタコトの中国語で何とか無事に買い物を済ます。そんな些細なことだが、私にとってはこれも生きた言葉に触れる貴重な機会だった。

実際に北京での生活が始まって、授業が開始されてみると、目の前の壁は思ったより高かった。特に一番の問題だったのが、中国語は見て理解はできるけど、人の話しは聞き取れないし、言いたい言葉が出てこない。またそれを言う勇気がない！ということだった。これは中国留学をする日本人なら少なからず当たる壁であり、人によっては大きな精神的ダメージにもなりうる。英語を使ってアメリカ人と話すときは、発音が若干悪くても相手が大体理解してくれる。しかし、中国語には声調という発音がある。日本人が中国語を勉強するのは漢字ばかりで一見簡単そうに思われがちだ。確かに、漢字の意味

が同じ言葉があるので理解することは早いですが、日本語には言葉の強弱がないため中国語を話すのは難しい。中国語を話さないとどうにもならないという環境でいきなり生活を送ることとなった。初めは自分の聞く力と話す力のなさに幾度となくつますいたが、私はこの留学体験が自分にとって今までになく大きな成果を得ることができる絶好のチャンスだと考えていたので、毎日の授業が終わってからも中国人の友達と勉強会をしたり、極力外国人の留学生と仲良くなるなど、普段から中国語を話すように心がけるようにした。私は幸運にもこのような友達にたくさん恵まれ、たとえ日本人同士であっても全て中国語でコミュニケーションを図るなどしていた。自分の知らない単語や言い回しなどはお互いに会話の中で教えあったりして、まさに「生きた言葉」に触れることができたのである。語学を学ぶのはどの言葉であれ、まず耳と口を慣らすことが一番の習得方法であると痛感した。北京での生活は、本当にこれまでの私の生活と全く違って、非常に内容の濃い、充実したものであった。そういう意味で、今回留学して、生活が一変したことに私はとても満足している。人との出会い、交流、全てが私には刺激的であった。

最後に、この半年間にいろいろお世話になった先生方、家族、同期の留学生たち、そして上海での友達たちに感謝するとともに、中国で学び、感じ、思ったそれぞれのよき思い出を忘れずに、この留学での経験を次のステップとして役立てたいと思う。



クラスメートと先生（夏）



同じクラスの韓国人（冬）

ティーチング・ インターシップ・ プログラム

私が思うティーチング・インターンシップ・プログラムの良さ

国際交流学科4年
相澤 早紀

Discovery School of Lancaster(アメリカ)
留学期間：平成24年2月6日～平成24年3月30日

私はこの大学に入学して間もなく参加した「留学ガイダンス」で、過去のインターン生の体験談と田中先生のお話を聞き、衝撃を受けました。そして、このプログラムなら自分のモチベーションを維持しながら、英語を勉強できるだろうと確信し、募集ガイダンスを受けると同時に、ティーチング・インターンシップ・プログラム(TIP)への申し込みを決めました。このプログラムの強みであり、他の留学プログラムと決定的に違う点は、派遣前に自分の力を伸ばす方法・派遣期間を十分に楽しむ能力を学ぶことができるということだと思います。このことは、派遣前から派遣期間を終了した今でも、一貫して感じていることの一つです。

私は2度のTIPトレーニングを経験し、2013年の2・3月に派遣されました。初めは、15分間の授業をするだけでもきついくらいの英語力しかなく、毎回の授業で自分が何を話したかも忘れてしまうくらいに緊張していました。周りの人の英語力や授業のアイデアに圧倒される一方で、英語のシャドーイングや授業のアイデア作り、授業の練習などを楽しんでいる自分もいました。1年目のトレーニング最後の授業では、自分自身の変化を実感できるほどになっていました。何よりも自分の授業を楽しめるようになったことが、私にとって一番大きな変化でした。この授業は今でも忘れられません。

1年目の最終派遣者選抜には落ちてしまい、それからすぐに次の目標を探し始めました。しかし、そんな中でいつも頭の中にあったことは、選抜に落ちた悔しさとそ

の年に派遣された仲間には負けたくない、という気持ちでした。海外で経験できることよりも多くのことを、私は日本で経験しよう(勉強しよう)！と心に決めて、がむしゃらに英語の勉強をしました。その結果が数字になって現れたのは、翌年度の5月に受験したTOEFLでした。そのテストで得た自信と1年目に一緒にのプログラムでがんばってきた仲間が存在が後押しになり、2年目のTIPへの挑戦を決めました。2年目のトレーニングでは、前年度の自分の授業に劣らないような授業案、また英語への気持ちを維持することに気を使いました。

派遣されてからは、とにかく毎日が楽しく、生徒たちのことをすぐに大好きになりました。そして最後には、大号泣してさよならを言いお別れしました。また、人生で初めてのホームステイだったので心配していた部分もありましたが、ホストファミリーのおかげで毎日楽しく、新しいことを経験させていただきました。学校での経験も家族との経験もすべてかけがえのないものとなり、2年間がんばって本当に良かったと思います。

今では1年目に選ばなかったことを悔いることはなく、人より2倍の経験ができたと感じています。2年間を通して分かったことは、初めから何かをすることができるとは重要ではありません。明確な目標を持ち、それに向かって努力し続けるということが一番重要なことだと感じました。この原理を使えば、もう何も怖いものはありません！ぜひ、勇気を出して、このプログラムに挑戦してみてください！



with 2nd graders



in a KIMONO class



West End School(ニュージーランド)
 留学期間：平成24年2月6日～平成24年3月30日

Ami! Ami! Ami!

国際交流学科3年
 大草 杏美

「日本語ってなんでひらがなとカタカナと漢字があるの？」今まで日本で生活している大学生だったら考えもしないこと。このような質問が生徒から機関銃のように飛び出してくる、校舎をふらつこうものなら生徒が走って追いかけてくる、「Ami!」「Ami!」「Ami!」誰が話しかけてきているのかわからないくらいいろんな生徒から名前を呼ばれる、これが私の経験したティーチング・インターンシップです。

もちろん学校に通い始めてすぐになんでもできたわけではありません。生徒の英語も聞き取れないこともしばしばありました。しかし、失敗を恐れないそして挑戦し続けるという2つのことを先生や仲間からトレーニング期間中に学んだおかげで、2カ月頑張れたのだと思います。私が日本の授業をする中で特に気を使っていた点としては、どのようにしたらよりわかりやすく伝わるのか、どんなことに生徒が反応しよりエキサイティングな日本の授業になるのかということです。日本の授業以外の他の先生の授業やランチタイムに生徒と交流する中で、日々ヒントを得ていました。またクラス毎に雰囲気は全く違うので、あのクラスではこうだったけど次のクラスはこうしてみよう、など同じトピックでも一回一回やり方を変え全く違う授業になっていました。この経験によって生徒あつての日本の授業なのだという、授業って生きているのだということを感じることができました。そしてティーチング・インターンシップを通して日本のことを客観的にみるという貴重な経験をするこ

ができました。その結果、普段日本で生活していく中で当たり前に行っていたことにもっと関心、疑問を持つようになるようになりました。

また私はこのインターンシップを通じて、Pay it forward を意識するきっかけにもなりました。Pay it forward とは自分が助けてもらいその場でお礼がすぐにできなかった時、自分が今度は他の人を助けることで恩をつなげていくというつまり恩を次の人へ送るという行動です。たった2ヶ月という期間の中で West End School の生徒、先生、ホストファミリーやニュープリマスの街の人などたくさんの人に出会い、たくさん助けられました。私がこの2カ月の中で助けてもらった人すべてに恩返しはできませんが、私がこの助ける気持ちをつなげていくこと Pay it forward はできるのではないかと思います。



折り紙のハートで
 日本国旗▶



日本の授業 扇子



生徒の誕生日会にて

認定留学

マッコーリー大学附属語学学校(オーストラリア)
留学期間：平成24年2月13日～平成24年9月28日

念願の留学と得たこと

国際交流学科3年
金子 葵

私は大学に入る前から留学を一つの目標として大学生生活をすごしました。大学入学後、いろいろなプログラムの選考に挑戦しましたが、参加できませんでした。しかしそれでも留学だけは諦められず、認定留学という形でオーストラリアに留学することができました。自分で一から始めなくてはいけなかったのでエージェントの方との連絡の取り合いと、認定留学として留学するための日本大学の規程と合致させるのがまずは大変でした。オーストラリアに行ってから問題がいつも隣り合わせしており、私の留学は一難去ってまた一難、という言葉がとても合っていると今思います。例えば2週間のホームステイ後のシェアする家を探すためアポを取るために必要な携帯を手に入れ、セットアップし何人ものオーナーとアポを取って部屋を見つけたり、オーストラリアの銀行の口座を自分で開いたり、頼る友達もいなく、最初が一番忙しく辛かったです。英語についてもはじめはコミュニケーションをとるのが難しく、何度も悔しい思いをしました。でも悔しさは一番のやる気になることが最初の1か月でわかりました。この悔しさからオーストラリアでの留学で私が得たものは、最初のきっかけをつくることの簡単さと重要さです。最初は誘われたら、行ってみる、やってみる、という姿勢でした。しかしこれは留学する前の私の性格です。留学してからはいつも新しいことを探し、積極的に自分から誘うようになっていました。いつも自分で待っているだけでなくやりたいことを探しました。うまくいく保証がなくても挑戦しました。そしてやってみると意外とうまくいくことがわかり

ました。英語で話しかけるたびに毎回緊張しますが、話したあとは後悔したことが一度もないことに気づき、さらに楽しくなかったこともなくいつの間にか知らない人にも気軽に話しかけられるようになっていました。とても勇気がついたと思います。オーストラリアは多国籍文化の国で日本とはなにをとっても違い、私の場合はそれがカルチャーショックになるわけではなく、やることすべてが新しく、毎日楽しみながら過ごすことができました。適応能力も備わったと思います。そして私はいつも時間がかかる難しいことを後回しにしてしまう癖がありました。それもオーストラリアでは考える時間もなく、とりあえず行動しなくてはならない日々でした。そして日本に帰国した今、母国語で生活することがとても簡単に思え、初対面でも丁寧に自信をもって話すことができ、毎日が小さなことでも楽しいです。勉強に対する姿勢も変わったと思います。3年生になったというのもありますが、オーストラリアで出会った人はみんな勉強を熱心に取り組んでいて私も大学で国際関係を学べるので自分の専攻を頑張りたいと思いました。オーストラリアでの思い出を振り返ったり出会った人を思い出したりすると自然と自分の力になって勉強も頑張ることができます。私にとって留学は英語を学ぶだけでなく、他の国の文化を学ぶことができたり、なにより自分に自信がもてるようになりました。人間性を高めることができたのでとても自分の留学に満足しています。しかしこれからも英語力を維持し、高まっている気持ちをなくすことなく就活や今後の生活に生かしていきたいです。



シェアハウスでオーストラリア人のオーナーと台湾人、韓国人、イタリア人のシェアメイトとホームパーティー



語学学校での多国籍な友達

柳川海外交流
奨学金留学



ヨハネス・グーテンベルク大学(ドイツ)

留学期間：平成 23 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 20 日

Auslandssemester in Mainz 2011/12

国際関係学科 4 年
倉重 柊二

Als ich in Mishima das Studium der Internationalen Beziehungen an der Nihon Universität anfang, wollte ich auch im Ausland studieren und die deutsche Sprache war meine erste Fremdsprache. Ich wusste 2009, dass man als Yanagawa Stipendiat Austauschstudent an der Johannes-Gutenberg Universität (Mainz) werden konnte. So war meine Überlegung: Wenn ich frühzeitig in Deutschland studiere, kann ich wegen den Erfahrungen in Zukunft einfacher im Ausland studieren. Mein Ziel ist es von meinem Studium so viel wie möglich mitzunehmen.

Am 02. April 2011 als ich in Deutschland angekommen bin, war es schon warm, viel wärmer als in Mishima. Durchschnittlich ist das Klima aber kälter und trockner als in Japan. Im Winter fiel die Temperatur sogar auf -16, trotzdem war es in meiner Wohnung wegen den Zentralheizungen nie kalt. Und im Sommer stieg die Temperatur auf höchstens +25. Alles in allem war es sehr angenehm.

In Mainz gibt es insgesamt 13 Studentenwohnheime. Mein Wohnheim trug den Namen „Hechtsheim“, und war von den 13 das größte, dort wohnten ca. 670 Studierende. Alle Wohnungen wurden in Wohngemeinschaften (WGs) geteilt. Ich habe zusammen mit einem Freund gewohnt, also in einer 2er WG. Jede Wohnung hatte eine Küche, für jeden ein eigenes Zimmer, eine Toilette, Möbel, eine Dusche aber kein Bad. Die Miete betrug 265€.

In Japan lernte ich die deutsche Sprache meistens alleine über Bücher und hatte so fast keine Gelegenheit Deutsch selber zu sprechen, deshalb konnte ich mich am Anfang nicht gut verständigen und hatte Probleme Deutsch akustisch zu verstehen. Innerhalb von 2-3 Monaten hat sich aber mein Deutsch schnell verbessert, geholfen dabei hat mir auch, dass ich in Japan schon die Basis-Grammatik intensiv gelernt hatte.

Im ersten Semester habe ich an einem Deutschsprachkurs teilgenommen, dort habe ich viele Austauschstudenten aus Taiwan, Korea, Frankreich, Rußland, Polen usw. kennengelernt, aber die meisten studierten nur ein Semester d.h. ein halbes Jahr, ich hingegen ein Jahr. Im zweiten Semester habe ich an einem Russischsprachkurs teilgenommen und dort viele deutsche Freunde kennengelernt.

Ich habe an den Vorlesungen und Veranstaltungen der Sprachwissenschaft und den Sprachkursen teilgenommen. Weil ich in Japan Sprachwissenschaft nicht lange studiert hatte, habe ich nur an den Einführungskursen teilgenommen. An der Mainzer Uni lernt man nicht wie an der Nihon Uni, die Studenten lernen sehr gerne zusammen und sie stellen oft Fragen an ältere Studenten, die schon von bestimmten Bereichen ein tieferes Verständnis haben.

Nach dem Bachelor möchte ich wieder in Deutschland als normaler Student Sprachwissenschaft weiter studieren, weil die Studiengebühren in Japan sehr teuer sind, an der Mainzer Uni gibt es keine, das Studieren ist dort kostenlos.



Mainzer Dom



Johannes Gutenberg Universität

短期海外 語学研修

ストーニーブルック大学（アメリカ）

留学期間：平成 24 年 8 月 5 日～平成 24 年 8 月 27 日

短く、濃く。

国際総合政策学科 2 年
皆川 絢里

私は、ニューヨーク州立ストーニーブルック大学への 3 週間の研修プログラムに参加しました。入学前より大学生になったら留学したいという希望を持っていましたが、入学すると、大学主催の公務員試験対策講座やサークルなどにも興味が湧き、長期間の留学に参加する事に躊躇いを感じ、それらを諦めなくても良い、この短期のプログラムを選択しました。

現地では、月曜日から木曜日まで、朝 9 時からお昼休みを挟んで午後 4 時まで 6 つの授業を受けました。2 つのクラスに分かれ、ネイティブの先生が担当して下さいました。1 クラスは少人数だったので、一人一人が先生と沢山コミュニケーションをとりつつ授業を受ける事が出来ました。また、東京外国語大学の学生も含めた日本人だけのクラスでしたので、日本人にありがちな発音や文法上のミスを重点的に指導して頂き、ハードだけれど、限られた時間で効率のよい授業だったと思います。私は、ライティングは好きでも、発音やアクセントなど、実際に口に出して英語を使う事が苦手だったので、その習得に他の人達より時間がかかり、とても苦労しましたが、最終的には、発音もスムーズとなって自信がつき、充実感、達成感を得る事が出来ました。

この様に、ほとんど勉強ばかりしている 1 日ですが、週末の金曜日、土曜日、日曜日は授業がなかった為、電車で 2 時間ほどにあるニューヨーク市に行って買い物や観光をしたり、お世話をしてくれる現地学生さん達に遊

びに連れて行ってもらったりと、お楽しみも満載でした。これらも、単に遊んでいるように思えますが、実践的な英語を学ぶ良い機会になりました。授業で教わった発音やアクセントに気を付けながら現地の人に話しかけ、通じた時にはとても嬉しく、また、通じなかった時には、後日授業で先生に質問をしてその問題を解決しました。この様に学びと実践を交互に体験出来る事もこのプログラムの長所だと感じました。

学習や観光以外にも、異文化交流などでは、外国では日本がどのように見られているか、また、日本の習慣や考え方をどう説明するかを考える経験をする事により、視野が広がり、新たな価値観を持つ事が出来たと私は思っています。また、『話さなければどうしようもない』という状況におかれる事で、自己主張をする事に対する抵抗が激減しました。日本人は、外国人に比べて主張をしないと言われる。ストーニーブルック大学に限らず、留学プログラムに参加する事で、その後の人生、例えば就職活動で必要となるであろう自己表現の習慣を得る事が出来ます。サークルやアルバイトなどに参加して日々忙しい人達でも参加出来るのが、短期プログラムの利点だと思います。そして、短期であればこそ、やる気次第で結果はいくらでも変わってきます。留学に興味がある、でも他にもやりたい事もある、その様な方達には特にこの短期海外研修をお勧めします。

是非、短くても濃い留学を体験してみてください。



修了式にて



自由の女神前

短期海外 語学研修



ハワイ大学（アメリカ）

留学期間：平成 24 年 8 月 5 日～平成 24 年 8 月 22 日

UH Summer Seminar 2012 体験記

専攻科食物栄養専攻 2 年
江打 真衣

UH Summer Seminar は、オアフ島にあるハワイ大学のマノア校の人間資源学部栄養・食物学科において、ハワイの社会・生活・習慣・食文化等を英語を通して身に付け、英語力の向上を図るプログラムです。授業は主に栄養・食物学科の新しい校舎で行われましたが、キャンパス内の図書館、情報処理室など様々な施設で授業を行いました。

基礎となる栄養学は、体のしくみや妊娠期・授乳期の栄養、離乳、肥満、栄養成分表の見方、日本と現地のスーパーで販売している食品の違いを直接商品をチェックして調査するなど生活に密着した実習もありました。調理実習では、ハワイ独特の料理として有名なスパムむすび、パイナップルを揚げたデザートを作りました。さらに伝統的な「アメリカのおふくろの味」ローカルメニューの授業の一環でミートローフやチョコチップクッキーなどを作り、日本とは異なる食文化に触れました。

栄養学以外の授業では、特にハワイの歴史・文化・社会の授業に興味を持ちました。これまで知らなかったハワイの知識を得て、さらにハワイに興味を持ちました。また、ボディランゲージを使った英会話の授業はとても印象的で、自然に英語を習得できました。さらに、フラダンスの授業では、キャンパス内の芝生の上で、先住民のハワイの言葉の意味や体の動きの意味を教わりました。見た目は優雅なゆっくりした踊りに見えますが、意外と足腰の筋肉を使います。フラダンスの先生も優しく丁寧に指導してくださり、踊りに秘められたストーリーを表現できるようになりました。



アグリカルチャーサイエンスビルディングの前にて

大学での授業の合間に、様々な施設での研修もありました。特に現地の病院の研修では、現場で働く日本人の RD（アメリカの管理栄養士）の講義や、厨房見学をさせていただきました。現場で活躍する日本人の RD の仕事に大変感銘を受けました。また、現地の高校で文化交流を行う授業もありました。ハワイではどのようにして日本語を勉強しているのか直接体験でき、日本から持参した折り紙や日本の歌でクラスの人達と楽しくお話をしました。昼食を一緒にとったカフェテリアでは、生徒達の日常的な一面を垣間見ることができ、お互いの趣味の話など、英語を駆使して楽しい時間が過ごせました。さらに、老人福祉施設でも地域の高齢者の皆さんと交流を行い、歌やダンスで親交を深めました。現地のお年寄りの方はとても明るくアクティブに感じました。週末や授業の合間に歴史や文化の地域見学にも行きました。真珠湾やビショップミュージアムさらに、移民の歴史を展示したオールドプランテーションビレッジなど、直接歴史や文化に触れることで、多くのことを感じる事ができました。

研修に参加してハワイの学生生活を体験し、数多くの貴重な経験をしました。帰国前にハワイ大学を離れ、ワイキキのホテルに二泊しました。観光地として有名なワイキキのリゾートエリアが大学の目と鼻の先にあり、大学のローカルな環境が懐かしく思われました。この研修の参加は、大学生活の印象深い思い出になりました。



KOKUA KALIHI VALLEY の老人ホームにて

短期海外 語学研修

北京大学国際関係学院（中国）

留学期間：平成24年8月6日～平成24年9月4日

ようこそ北京大学へ

国際総合政策学科2年
関 美佳

2012年8月6日から1ヶ月間、私たちは中国、北京大学での短期語学研修に参加しました。成田空港から数時間、北京首都国際空港に着いた時は、これから始まる研修への期待と不安で胸がいっぱいでした。空港からは北京大学の事務員の方が引率でついて下さり、一緒に私たちが宿泊するホテルまで移動し、研修や大学について説明を受けました。

この研修では、出発前より既に1日1日のスケジュールが綿密に組まれており、私たちはそれに沿った形で研修を受けます。基本的に平日の午前中は北京大学で中国語の授業、午後と休日は自由活動として私たちは北京市内を自由に散策したり観光を楽しんだり、翌日の授業の予習・復習をしました。また研修中には数回、語学の授業とは別に大学講師の方が政治や中国文化についても講義をして下さいました。

北京大学へ来てから私はまず大学の敷地がとても広い事に驚かされました。広大な敷地の中には学部棟、食堂、露店や日用品を扱うスーパーが複数あるため毎日の衣食には全く不便を感じることなく研修期間を過ごせました。ただ、中国では日本と異なり、水道水をそのまま飲むことができません。飲み水については各自売店で飲料水を買う必要がありました。日本では考えられないですが、これもまたよい海外での経験として捉えるかどうかは自分次第でしょう。他にも大学構内と付近には銀行があり日本円から中国人民元への外貨両替も難なく行うことができ、安心しました。

中国の物価はとても安く、何をしても思ったよ

りお金はかからずに済みました。例えば大学の学食でお腹いっぱい食べたとしても1食100円程しかかかりません。特に地下鉄（中国では地鉄と呼ぶ）の料金は一律2元と安く、自由活動で移動する際は私たちの大切な足となりました。皆さんも北京を訪れた際は便利なので是非利用して欲しいと思います。

自由活動の時間を利用して私はほぼ毎日、大学の外へ飛び出しました。地鉄や公共汽車と呼ばれる路線バスを利用して天安門をはじめ北京動物園や北京オリンピック公園等の有名な観光地へ足を運びました。外観的にはただ観光やお出かけをしているようにしか見えなくても知れませんが、出かけた先は全て自分が中国語を実践する場でもあります。私はその日授業で習った単語やフレーズを現地の方へ積極的に使う事を心がけました。こうして現地の方とふれあった時間は自分にとってとても貴重な体験です。

こうして色々研修について書きましたが、何よりも自分自身で現代中国を体験してほしいと思います。

「百聞不如一见」（百聞は一見に如かず）これは中国のことわざです。何事においても人から話を聞くのは大切ですが、自分の体で見たり、聞いたり、感じたりする方が得るものはずっと大きいと思います。

帰国した後は参加してよかったと心から思える、成長を実感できる研修です。

皆さんも是非参加してみてください！



北京オリンピック公園にて



故宮にて班のメンバーと

短期海外 語学研修



WITT (ニュージーランド)

留学期間：平成24年8月21日～平成24年9月16日

ニュージーランドで過ごした1ヶ月

国際ビジネス情報学科3年
中田 朋秀

初めて見た海外

国際総合政策学科2年
谷口 遼

平成24年8月21日から約1ヶ月間、三島市の姉妹都市であるニュープリマス市にてホームステイ滞在した。

現地滞在中、月～金曜日の午前中は WITT で英語の授業を受けた。授業内容は、日常会話を中心にマオリの歌や歴史、日本とニュージーランドの違いについてなどであった。私達のクラスの担当教員である Mrs. Vida の授業は、英語の苦手な私にもわかりやすい内容のもので、とても楽しく学ぶことができた。午後は、ニュープリマス市長訪問や WITT の現地学生との交流など様々なアクティビティが行われた。ニュープリマスの人々はとても温かく迎え入れてくれ、お互いの国の文化や特徴など色々な話をすることができた。また現地の小・中学校を訪問し、生徒達と交流する機会もあり、日本語を学んでいる生徒と一緒に書道をしたり、マオリの伝統的な踊りであるハカを披露していただいたりした。子供達はとても明るく、その元気のよさに圧倒されてしまった。

出発前、英語が苦手な私は研修に対して不安な気持ちもあったが、多くの方々の支えにより、かけがえのない人々と出会うことができ、沢山の思い出を作ることができた。そして、最終日の Farewell party では感動し、涙を流していた。この研修を通じて私は、正確に言葉を伝えるということよりも、伝えたいという気持ちが大切だということを学んだ。この気持ちを忘れずに、これからも語学の勉強に励んでいきたいと思う。

私のステイ先は、母親、娘(12歳)、息子(7歳)、ニュージーランド人の居候(24歳)、ネパールから2年間留学に来ていた女子(21歳)という家庭であった。ホストマザーがとてもフレンドリーで活動的な人だったので毎日、賑やかな日々を送ることができた。

私にとって今回は初めての海外渡航であったが、なぜ研修に参加しようと決意したのかということ、小学生時代にホストファミリーとして外国人を受け入れたとき「英語を話せるようになりたい!」「外国人の友達を作りたい」と思ったこと、そして自分もホームステイをしてみたいと思ったからである。また、ホームステイした方が英会話の機会は断然多く、日常会話を練習できるとも考えていた。さらに、家族の一員として生活することで、訪問先の生活習慣や文化を実際に経験できるとも思った。これらは今思いかえしてみても全くこの通りで、本当にホームステイできてよかったと思う。

初めて海外に出た私にとっては何もかもが新鮮で、驚くことが多く、また感心することもあった。ニュージーランドはとても親日的な国ということもあるが、食事や国民性はアメリカやイギリスよりも自分に合っていたような気がする。自分の中では当たり前が通用する、また曖昧さが通用する、住み慣れた日本を飛び出したことで自分自身と向き合うことができたこと、海外に家族ができたこと、そして短い期間ではあるが英語の練習ができたこと、などが今回の研修で得られた大きな成果だと思う。



ニュープリマス市長と共に



WITT 学長と共に



世界の舞台へ今はばたこう



MEMO

